

図書館だより

vol.34
No.3

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

北海学園大学附属図書館報 第34巻3号(通巻203号) 2012.10.30



画：川田裕之

CONTENTS

本の“虫”のあれこれ 高木裕之	2
「二重性」、「両義性」という命題 内田昌利	3

石月真樹 私が薦めるこの1冊／アルバイトーク	4
図書館利用ガイダンス集計	5
図書館レポート2012	6
ブックハンティング!!／編集後記	8

本の“虫”のあれこれ

文＝高木裕之

(たかぎ ひろゆき／経営学部教授)

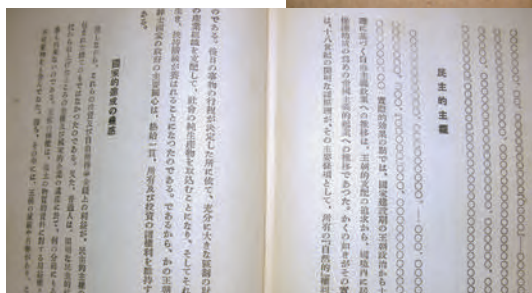
テレビの受け売りであるが、最近、公営の図書館では利用者の減少に歯止めをかける目的で、さまざまな取り組みが行われているらしい。これはどうなのだろう？って思ってしまう取り組みもあるが、共通しているのは、カフェテリア・自販機を設け、軽食やドリンクをとりながら読書に時を過ごす環境の提供である。時折散策する書店では喫茶店・レストランなどが併設されていることが多いとはいえ、さすがに店内でこうした光景は見られない。しかしながら、昔と比べれば書店も顧客にかなり優しくなっているように思う。そこでは、(長時間)閲覧のためのコーナーがあり、テーブルと椅子が用意され、年間8万点という新刊書(の一部)たちが本の虫を待ち構えている。

ところで書店巡りをしていると、本との思いがけない出会いに遭遇することがある。先日、この偶然的な出会いを積極的につくり出そうとする企画が新聞にでていた。作家と題名を伏せたうえで書き出しの一文だけを本のカバーに印刷し、こうした本で棚を埋めて購入意欲をそそる。なんでも、「本の闇鍋」というそうだ。「本の闇鍋」とは言い得て妙であるが、この手法は本来重要な情報であるはずの作家と題名を意図的に隠し、書き出し以外を閲覧させないというのだから、逆転の発想だろう。と、思うのは文学に疎い私ぐらいか。大学入試などで出題された川端康成の『雪国』の例を出すまでもなく、書き出しに作品の命が吹き込まれており、それを見逃さないのが本の虫たちなのであろう。

本の虫もいろいろである。読書家もいれば紙魚(シミ)やチャタテムシのような本当のムシもいる。古い本を開くと、1匹や2匹、ムシたちに出くわさないことはない。若い頃はその場で臨終であつたが、最近は「よくそこの本の良さが分かったぞ」などと、理由もなくこのムシたちに愛着がわいたりする。

私が蔵書する古書の一冊に、大正時代に出版されたソースタイン・ヴェブレン著『特権階級論』の訳本がある。学生時代、神田の古本屋を散策していた

ときに見つけたもので、棚に雑然と無造作に並べてあったおかげで、出会えた本である。書名もさることながら、中を開けてびっくり。ところどころ虫食いならぬ文字がない。ページによってはほとんどない。戦前、小林多喜二の『蟹工船』や幸徳秋水の『平民主義』などが出版法により発禁・押収などの処分を受けたが、こうした本を実際に手にし目にしたのは初めてのこと。隠されれば余計見たくなるのが人間の性であり、珍しく原文を求めて図書館に足を運んだが、当時、図書館と言えば自習室に出没したり、開架図書を眺めるぐらいがせいぜいだったので、結局、虫食いの前の状態を原著で確認するまでには至らなかった。



活字離れが言われて久しいが、この傾向は漫画界でも同様らしい。週刊誌・月刊誌の発行部数はピーク時の3割になっているという。しかし、漫画界の場合、個人が投稿サイトなどを通して自作を発表、ツイッターやブログで紹介・宣伝されるというように、印刷物によらない表現形態がとられはじめてるので、分野としては衰退どころか発展しているのかもしれない。もしかして、近い将来、学術書も最初からネットに書き下ろされ、電子ブックになっていくのだろうか。もしそうなら、虫はバグではなく愛着の持てる“虫”であればいいが…

「二重性」、「両義性」という命題



文＝内田昌利

(うちだ まさとし／経営学部教授)

世の中の現象、とりわけ社会現象は複雑で矛盾や不条理を内包していることが多い。だから複雑な社会現象を理解しようとしたら、単純な見方では理解しきれない。見方を変え、多角的・多面的に読み解こうとしなければ社会的リアリティの全体的理解には迫れない。一面的な仮説・検証の操作で得られるのは指定された条件の下で得られた結論で、その範囲での内的妥当性の当否が問われるだけである。人間の欲や利害やそれを包む理念が複雑に絡み合う組織現象や社会現象がそれで理解できるとは到底思えない。

経済学・経営学に「管理の二重性」という命題がある。これは、資本主義的生産過程の特質から「資本家の指揮は内容からみれば二重的であって、それは、指揮される生産過程そのものが一面では生産物の生産のための社会的な労働過程であり他面では資本の価値増殖過程である」というその二重性によるのであるが、この指揮はまた形態からみれば専制的である」(K. マルクス『資本論』第1巻)という意味のもので、これによって「管理」という社会的リアリティの理解により近づくと考えられる。哲学、文化論、経済学や経営学などのさまざまな分野で、これまで社会的リアリティの全体像を理解しようとして、こうした「二重性論」「両義性論」が論じられてきた。

最近、研究室の書類を整理していてふと目にした社会学者・船橋晴俊の「福島原発震災の教訓」(『書斎の窓』2012.6)が気になった。

原発は50年代以降政治主導で、危険性や廃棄コストに目をつむって安全で安価なエネルギーと喧伝され推進されてきた。原発が身近に作られるのは誰もが嫌だ。被爆労働を含む定常的汚染、放射性廃棄物、事故による深刻な汚染の危険性、しかもそれら負の効果はいくら費用を投入しても解消不能である。だからそれを推進しようとするれば社会的緊張を引き起こし、人びとの抵抗・反対を呼び起こす。

にもかかわらず、原発は現に社会的に推進されてきた。なぜ可能だったのか。一定の主体や社会が生み出す環境負荷を他の主体や社会に外部転嫁する「二重基準の連鎖構造」というメカニズムが存在したからだ、という。原子力利用の安全性／危険性に関して自らに課す基準よりも不利な基準を他の主体に課す態度が複数の主体間で多段階に採用されるメカニズムをいう。大都市圏は受益圏として危険性を負担せず、福島県などの地方に押しつけ、福島県などは放射性廃棄物を青森県に排出し、青森県は高レベル放射性廃棄物の中間貯蔵地として未定の最終処分地への排出を要求するといった二重基準の連鎖構造が採用され、そのうえで、受苦を補償する形で電源三法交付金などの原子力マネーが立地に伴う経済的・財政的メリットを増幅する。こうした制度的仕組みが完成されてきた。

この制度的仕組みが安全神話とともに人びとの行動に網をかけ、根源から安全性／危険性を問うことを妨げてきた。そのことは誰もがうすうす気づいていたものだ。

その事実は単なる原子力技術の問題ではない、社会問題であり、社会科学の対象である。船橋はこうした社会問題を解く鍵概念として、組織や社会システムが有する「経営システム」と「支配システム」の両義性に目を向け、そこに連動性と逆連動性の関係を見いだす(『組織の存立構造論と両義性論』東信堂2010)。その内容が原理論的整理にかたむき、いささか教条的な印象を与えないわけではないが、原発問題を社会現象として、両システムの逆連動のダイナミズムと捉えることで、その本質的でリアリティをもった理解に迫ろうとする。寡聞にして社会学でもこうした両義性論が展開されていることを知らなかったこともあり、あらためて二重性や両義性、さらには多義性の問題を考えるきっかけを与えられた。

私が薦める この1冊

斉藤洋著

『ルドルフとイッパイアッテナ』（講談社、1987年）

文＝石月真樹

（いしづき まさき／法学部講師）

「ぼくはルドルフだ。……いま、きみたちにわかってほしいのは、ぼくがルドルフって名まえのねこで、とにかく字がかかるっていうこと。それからもうひとつ。じつをいうと、ぼくはまっ黒なんだ。つまり黒ねこってことさ。黒ねこのルドルフ、そう覚えておいてほしい。」

一人称「ぼく」の黒猫ルドルフが「きみたち」に語りかける、兄貴分「イッパイアッテナ」との「とびきりゆかいな、のらねこ生活。」の物語である。平仮名ばかりだし、随分と子供っぽい内容と思われるだろう。ごもつとも。なにせ「小学中級」にお勧めの児童文学である。私自身、読んだのはかれこれ25年も前の9歳のときだ（今でも時々引っ張り出して読むけれど）。

「小学中級」本を挙げるなどという“暴挙”にお叱りを受けそうではある。実際返す言葉もない。けれども、どうしてもこれを挙げずにはいられない。“お勧めの1冊”と言われて最初に頭に浮かんだのがこれ

なのだから。嘘はつけない。

とはいえ、その魅力を語ることも私には難しい。これを読めば絶対に猫が好きになる、それ以外に何を語れというのか。それでもあえて語るならば、そう、この本を読めばきっと「教養」が身につく。授業に身が入らず、こんな事を勉強して何になるんだと嘆く大学生だって、ルドルフに感情移入しながらこの本を読み、「ばかやろう。なんてこというんだ。そういうのを、『知識にたいするほうとく』っていうんだ。それに、『絶望は、おろか者の答え』ともいうぞ。」とイッパイアッテナに一喝されたら、きっと誰だって反省する。他の誰でもない、イッパイアッテナが言うのだから。彼の言葉には、どんな“人”よりも重みがある。

余談だが、この本を読了したとき、続編があと2冊もあることにあなたはきっと歓喜するだろう（その代わり続編も読了してしまったときの寂しさは計り知れない。まだ続きが有りそうな終わりなんだけれど…）。

アルバイトーク

閉架水先案内

文＝大原智明

（おおはら ともあき）

大学院文学研究科 日本文化専攻 修士課程2年

僕が大学院への進学を考えていることをある先生に伝えたとき、受けたアドバイスは「取り敢えず図書館の閉架に入ってみろ。勉強になるぞ」でした。僕は早速図書館へ駆け込み、カウンターで入庫手続きをしました。

閉架に入ると、乾燥した空気のなかに紙とインクのおいが混じり、空調機の静かな音がどこからともなく聞こえてきました。そんな空間に、和書、洋書、雑誌のバックナンバー、全国の大学の紀要などの大量の蔵書がありました。僕はひとつひとつの本棚を眺めて歩き、自分の専門に近い本を手にとってみたり、製本された雑誌を開いて論文を読んでみたりしていま

した。自分の好奇心の赴くままの行為のひとつひとつが「勉強」になっていました。図書館が、知的な遊びの場となっていたのです。

僕が初めて閉架に入ったときのことを書いたのは、図書館のカウンターで働いていて気になっていたことがあったからです。それは閉架に入りたいという学生さんが少ないということ。

いずれみなさんは卒業論文を書くことになります（学部によって必要のない場合もあります）。そのときになってテーマに悩んでいては遅いでしょう。一度は閉架に入って、自分がどんな本に興味を持つのかを確認してみたいかがでしょうか。

●●●● 図書館利用ガイダンス集計 ●●●●

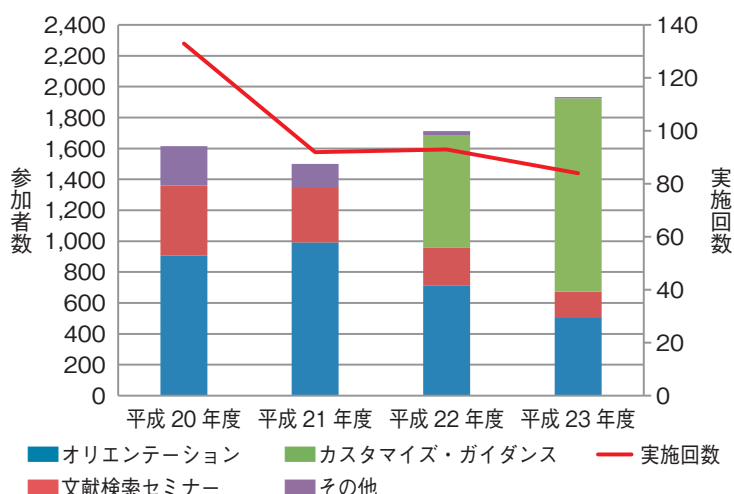
図書館利用ガイダンスにおける参加者数と実施回数の推移（平成 20 年度～平成 23 年度）

情報の宝庫である図書館を使いこなすにはどうすれば良いのか……？

皆さんに図書館についてお知らせする場が「図書館利用ガイダンス」です。図書館の基本的な利用方法や様々なデータベースを使って文献を入手する方法などを紹介しています。

毎年実施しているガイダンスの過去 4 年の推移についてご報告します。

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
参加者数	1,615	1,500	1,712	1,932
実施回数	133	92	93	84



オリエンテーション（4～5月）

主に新入生を対象に、図書館の基本的な利用方法を説明します。本の探し方から貸出・返却方法、閲覧席や閉架（書庫）の見学なども行います。（ゼミでの申込）

文献検索セミナー（6月～12月）

主に 2 年生以上を対象とし、オンライン・データベース等を駆使しながら、必要な文献を入手するための方法を説明します。（ゼミでの申込）

カスタマイズ・ガイダンス（4月～10月）

学部学習内容に連動させた複数ゼミ用のガイダンスで、図書館の紹介・OPAC の利用方法の他に、学部により異なったデータベースを用いて、その使用方法を説明します。

サポートセミナー（年数回実施）

オリエンテーション・文献検索セミナーの内容を説明します。個人で申込ができます。

参加者数 (内訳)		平成 23 年度			
		オ	文	カ	他
経済学部	1 部	164	24	266	
	2 部	16	0	38	
経営学部	1 部	45	27	265	
	2 部	0	0	0	
法学部	1 部	67	69	150	
	2 部	60	28	84	
人文学部	1 部	32	18	292	
	2 部	15	0	155	
工学部		110	0	0	
合計		509	166	1,250	7

実施回数 (内訳)		平成 23 年度			
		オ	文	カ	他
経済学部	1 部	9	3	7	
	2 部	1	0	1	
経営学部	1 部	3	2	5	
	2 部	0	0	0	
法学部	1 部	4	4	4	
	2 部	3	2	3	
人文学部	1 部	2	1	10	
	2 部	1	0	8	
工学部		1	0	0	
合計		24	12	38	10

※オ→オリエンテーション 文→文献検索セミナー カ→カスタマイズ・ガイダンス
※他→サポートセミナー、データベース講習会（学部ごとの参加者数・実施回数は集計していない）

図書館レポート

Library Report 2012



—レファレンス・サービス関係統計—

●学内レファレンス業務

	教 職 員	(前年度対比)	学 生	(前年度対比)	そ の 他	合 計	(前年度対比)
文献所蔵調査	38	+ 20	41	+ 26	5	84	+ 50
事 項 調 査	0	- 2	1	- 13	0	1	- 16
利 用 指 導	0	- 17	68	- 5	0	68	- 25
そ の 他	5	+ 3	9	+ 9	0	14	+ 12
合 計	43	+ 4	119	+ 17	5	167	+ 21

●相互協力業務

1. 複写

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	327	- 230	1	+ 1	328	- 229
受 付	1,616	- 338	0	± 0	1,616	- 338
合 計	1,943	- 568	1	+ 1	1,944	- 567

2. 貸借

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	87	- 15	1	- 1	88	- 16
受 付	343	- 135	0	± 0	343	- 135
合 計	430	- 150	1	- 1	431	- 151

3. 文献所蔵調査

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	0	- 4	0	± 0	0	- 4
受 付	7	- 8	0	± 0	7	- 8
合 計	7	- 12	0	± 0	7	- 12

4. 他館への利用願

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	29	+ 6	0	± 0	29	+ 6
受 付	27	- 2	0	± 0	27	- 2
合 計	56	+ 4	0	± 0	56	+ 4

—カウンター・サービス関係統計—

	2009 年度	2010 年度	2011 年度
入館者数	393,124 人 (1 日当り 1,384 人)	366,307 人 (1 日当り 1,280 人)	369,180 人 (1 日当り 1,295 人)
貸出者数	延べ 29,728 人 (うち学生 24,287 人)	延べ 31,434 人 (うち学生 28,538 人)	延べ 26,721 人 (うち学生 23,993 人)
学生一人当りの 貸出回数	2.7 回	3.2 回	2.8 回
貸出冊数	52,577 冊 (うち学生 40,627 冊)	56,577 冊 (うち学生 49,862 冊)	52,663 冊 (うち学生 45,645 冊)
学生一人当りの 貸出冊数	4.5 冊	5.7 冊	5.3 冊
PC ブース 利用者数	延べ 2,503 人	延べ 1,742 人	延べ 283 人
AV ブース 利用者数	延べ 4,577 人	延べ 4,691 人	延べ 2,551 人

平成 24 年 3 月時点在籍者数：8,609 名
開館日数：285 日

※本館と工学部で開館日数が異なるが、入館者数の 1 日当りの入館者数は、本館と工学部の入館者総数を本館の開館日数で割ることで計算することとする。
 ※ PC ブース利用者数：2011 年度途中より学内ネットワークの ID・PW を持っている場合は、カウンターでの手続が不要になったため、総数は不明。



Book hunting!! ブックハンティング!!

図書館でブックハンティングを行って
いることを皆さんは知っていますか？

学生に興味や関心のある本を直接書店
で選んでもらい、大学では買わないと思
われるような本でも図書館の蔵書に出来
る、自分の選んだ本が図書館にあるとい
う、学生の皆さんに少しでも図書に関心
を持ってもらう為にはじまった企画です。

今回は、今までに選ばれたブックハン
ティングならではの図書を一部紹介します。



他にもブックハンティングで選ばれた図書がたくさんあります！

今年度は、下記の日程でもう一回ブックハンティングがあります。学生の皆さん、興味がありましたら是非参加の申込をしてください。たくさんの参加をお待ちしております。

平成 24 年度 第 2 回ブックハンティング

日 時 2012年11月28日(水)
13:00～16:00(選書時間180分)【予定】
場 所 紀伊國屋書店 札幌本店
参加者数 10名
冊数制限 1人20冊



編集後記

あなたは今、モテ期ですか？

人生で3度訪れるというモテ期。今、図書館の視聴覚資料
では「モテキ」がモテ期です！

まだまだ始まったばかりの2012年下半期ですが、2012
年下半期貸出ランキングでも「モテキ」が堂々の1位を記録
しています。閲覧しようと思ったけれど、すでに貸出中で閲
覧できなかった…という方もいるのではないのでしょうか！？

そこで、「モテキ」がモテるポイントを3つ紹介します。(映
画「モテキ」公式サイトより)

ポイント① 200万部超の大人気コミックがオリジナルス
トーリーで映画化！

ポイント② 夢のキャスティング！ ゴージャスすぎるキャ
ストが勢揃い！

(森山未来、長澤まさみ、麻生久美子、仲里依紗、
真木よう子、など)

ポイント③ モテキ=J-POP ミュージカル！？

(ポップミュージックと映画との実験的かつ独創
的融合！)

こちらの作品の他にも、みなさんの夏休み期間中に、134
作品の新着DVDが入ってきています！ ぜひチェックして
みてください。

空き講や、授業が休講になってしまったそんなときには図
書館のAVブースも利用してみてもいいですか？